

「是は何か？」の現象學的考察 インガルデンの本質問題の爲に : 論文

著者	桑原, 謙之
雑誌名	龍南
巻	2 1 8
ページ	1 - 2 3
発行年	1931-06-25
その他の言語のタイトル	「是は何か？」の現象学的考察 インガルデンの本質問題の為に : 論文
URL	http://hdl.handle.net/2298/7021

論文「是は何か？」の現象學的考察

——インガルデンの本質問題の爲に——

桑 原 謙 之

一切の批判の批判は問の問に發しなければならぬ。

我々は今カント學派や先驗哲學の方法に對して此處に新しき觀念論的哲學を提出する所の本質直觀の世界、デカルトのコギトーにも似た所の純粹思惟の世界を見る事が出来る。ブレンタノよりトウルドウスキーを経て純粹論理的超時間的本質の世界を開き、更に從來の哲學が全て其前段階に過ぎなかつた所の學的哲學一般の最初の出發點を理論づけ、以て學の學と稱せらるゝに至つたフツサールの現象學こそは、カントの批判論と相對して共に現代哲學の最も論議す可き重大問題でなければならぬ。フツサールの現象學の方法が論理學、認識論、心理學に對して甚だ重要な地位を占むるに至つた事は論ずるまでもないが、彼の所謂現象學的還元即ち本質性を純粹に諦視する爲に其の現象學的剩餘として先驗的純粹意識『アイトスとしての世界。』のみを残さんとする方法は、自然的世界全體並びに之に關する一切の科學を除去して是を不問に附する事を要求する物である。此處に現象學は二つの重要な假定、或は哲學的立脚地即ち純粹意識を絶對的存在と觀る事（個人的實在を假定せず本質をば其獨自性に於て捉へる直觀で普通の直觀とは原理上全然別種の直觀。）並びに自然現象に於ける超越體に對してはエボケー（判斷中止）を行ふ事を前提とする。かくて現象學は其深奥に意識のノエシス、ノエマ的構造を措定して、觀念論的には、本質直觀論、本質論、純粹意識、明證概念等に於て大いに其長所を發揮したが、一

「是は何か？」の現象學的考察

方其が現象學的哲學として特殊な哲學的立脚地を採る限り、純粹意識の絕對存在論や內在的對象論が認識論的の吟味批判を受けるのは當然である。

思ふに現今の現象學研究は、研究者自身が幾多の論争に於て、非現象學者 (Nichtphänomenologen) と共に開いた所の種々の異議に對する反動として立脚して居る。即ち其は現象學的方法に對し、本質の現象學的解明を否定しかくて理想的對象性へ達せんとしたる所の物で、是が爲に現象學研究は本質問題に於て、現象學的立脚地よりのより深き證明、其は一方精密なる研究に依り間に來て來るべき事物の關係性を導入し、他方屢々生じ來る事象形態を論理的に論すべき證明を試みねばならぬ。かくて研究自體は全ての中から非現象學の方へ轉向せんとする故に、現象學研究は幾分なりとの現象學的見解を前提とし、且又現象學的方法轉向は出來るだけ慎重に適用しなければならぬ。此立脚地の證明には從來の現象學に見られなかつた種々の方向へ働きかけねばならぬ事は當然であるが、又同時に現在の位置に於ける現象學の基礎問題と根本的障礙を此處に想起する事は、荒れ狂ふ暴風雨の中に現象學に對する常に新らしく常に近づき難き領域を求めて來た先覺者達に取つても恐らくそうであらうが決して無意義ではあるまい。本質考察は有らゆる哲學的方法の最も普遍的な物であり而も總ての研究は、有ゆる方面より現象學を脅威して居るに拘らず閑却に附せられ勝ちであるが故に、今更に根本的な現象學的態度、即ち理論が其思想構造の騷亂に陥入つて最早遁道が無くなつた様に見えた時に與へらるゝ唯一條の救ひの索綱とも稱せられる所の本質への復歸、即ち『何か？』なる疑問語を先ず發する所の態度を以て「是は何か？」なる疑問を問ふ事は一層有意義なものでなければならぬ。然して一般に判斷乃至解答に就いては「問がかくあれば答はかくある。」の如き物でなければならぬ。問は單なる問其自體であるに拘らず、問の内容に依つては其が該當する對象に對して餘り多くに分れ、尙未だ其が初歩の状態に有る時と雖ども當該對象の認知の論據に於て、且幾何かの要素の不認知の意識より、單一では有得ずして、又問の對象を構成する所要問題が演奏する舞臺に於て、尙其以上に對象に就ての知識の一系列を包含せんと

するものなるが故に、問自體が當該對象の謬見を包含し、かくて全く誤れる答を導き出し、自ら虚構的な障礙に立至り、問の修正に依つて自らを排除し研究全體系を全く誤りたる道に導く物である。

かゝる方法は學の發展を阻止する物なる故、先ず問自體の本質的論據を各方面より検討する事が必要である。種々なる學問領域の限界に於ける不明瞭性に關してマイモングは、是は二つの相反せる仕方即ち「事實研究されて居る領域が相互し混入して居ると云ふ仕方。」に於てか、若しくは「研究の領域が相互に相觸れず従つて未研究の領域が兩者の中間に存在すると云ふ仕方。」に於てのいづれかであると云つて居る。一般に論說の起源と主題を構成する問の内容に關して教へられる所の物は不明瞭にして多義的なるが故、問の本質の明瞭な一義的な把握は完成された論文の理解の爲に必要な事である。此論文を読む前に前龍南(二一七號)掲載の石内氏「基礎的存在論の諸問題。」を一讀し、豫備知識として存在に對する概念を充分明瞭に把握せられる事を希望する。

「問ふ」と云ふ疑問表象の言葉は二種の意味を有し得る。

一、感覺に於ける特殊な意識作用の問題。

二、「問ふ」が其表現と解決を其中に發見するだらう所の疑問命題。尙此疑問命題に於ては疑問の眞實性が自ら表現する如く、我々が其に依つて問ふ所の疑問作用の志向的内容を含んで居る。(以下の叙述は此疑問命題と其志向的對象に關し、幾分排他的な制限を設く。)

先ず疑問命題は「……か分らぬ」「何か」「如何に」等の雜多な疑問詞の出場に初まり、そして特に其批判的命題が其に對して極印を押すの役を演ずる事に依つて其は批判的命題から區別されるのだが、一般に其は全く他の意味を有するか或はいづれの場合にしても既に疑問の機能を奪はれて居るから、此等の疑問詞が判斷に際して現はれて來ても敢て拒まぬ。

判斷の宣揚形式（Die Behauptungsform）は疑問形式を全く除外する一方疑問の位置の依つて其に適應する所の疑問詞をば省略し得る物であるが、斯くの如き場合疑問が其言詞の内容に關し畸形的で不完全であるは明かであり、然して間違つた言詞は發音の相應せる音調を邪魔する物である。一つの疑問と其判斷との間の差異は各言葉の層に於ける如く、深き層に存して居るが、疑問と判斷は先ず其が關聯する對象に依り區別せられる。此事を明瞭にする爲に先ず「判斷の對策」なる表現の多くの意義に關し其一つ一つを検討して見よう。

一、「判斷の對象」とは各判斷の要素（其眞偽の如何に關せず）即ち判斷の内容と思はれる事物の眞志向性を占有する其物でなければならぬ。是は其素材に就き且つ又單に契機に關し、判斷の内容を指示する要素を所有する事を表示する、（是に反し形式に就いては、此對象は判斷作用即ち内容への該當契機及び判斷形式と思はれる所の物に於て其存在様式の性質を提示する。）同様に該當せる判象が存在する場合此場合に於てのみ此對象は存在する。其も單に内容の志向的相關及び判斷形式に過ぎず存在自律（Selbstautonomie）に對しては何等の要求をも爲し得ない。併して其は交互に分離する契機を包含し得るだけに、該當せる判斷は矛盾せる意味性要素を其内容に於て包含して居るのである。此眞志向的判斷對象の名稱の爲に、古きスコラ哲學派の用ひたる「判斷の客觀的形式」なる用語を用ひるべし。 （志向的事象に相應する判斷の顯著なる多義性に依り、判斷の該當要素の多義的用語が選ばれる事は當然であるが、かゝる判斷に依り必然的に、限定されたる意義に於て對象の實在を認識し得ると信ずる。」

二、我々は此等事象の眞志向的關係性をば、認識主觀が判斷命題から獨立して存在する所の客觀的關係性から區別せねばならぬ。而して事象の客觀的關係性（客觀的事態 objektiv Sachverhalt）は、眞志向的關係性（或は事態 bloß intentionale Sachverhalt）と限定されたる判斷の客觀の様式との間に同化の著しき關聯が存するならば、其は判斷の對象となり得る。蓋し客觀的事態の全契機に就きては必然的に存する事を要せず、志向的對象の全契機に就きて、——其眞志向的存在

性質及び其に就ての獨立したる契機を除いて——存しなければならぬ。最後に來る者は其原理の中に契機に關する單一なる或は十全の契機を所有し得るが、其には形式的判斷客觀の何等の契機も相應しない。然し客觀的事態の此等の契機は、形式的判斷客觀の契機と共に自ら同化して、矛盾しない所の殘餘の契機であらねばならぬ。之獨立に存在する所の判斷の對象とまでなつた事態を判斷の客觀的素材と名附づける。各判斷は客觀的素材を含有するの要求をなす。然し其内容は形式的判斷客觀の規定に依つて、客觀的素材が事態の總体の中から一つの存在域を選択する様に要求する。必ずしも全ての判斷が客觀的素材を所有するのではない。唯是を有せざる判斷は多義的で矛盾に満ちた物であるのである。形式的對象の全契機（但志向性存在性質及び其に續く固有性質を除外する。）が少くとも一つの客觀的事態の一つの契機と同化し得る場合、我々は其判斷を「眞」と名附け、之に反し此同化作用が存し得ない場合其判斷を『偽』と呼ぶ。判斷對象に對する客觀的素材を把握せんとすれば、全ての誤れる判斷は對象を喪失する。

此處で示した判斷の形式的及び素材的對象の對立位置の場合と同様、一個の判斷の眞偽の規定の場合も亦考慮すべき且又含まれたる障礙を除去すべき幾多の問題を残して居る。此問題に一個の一致した解答を求めんとするならば、判斷の眞偽に關する定義は肯定的判斷に示された場合のみ價值がある。故に一般的には判斷の眞偽に關する他の定義を求めねばならぬ。而して是が爲には他の類似の問題が斯くあると同様單に他の普遍的な判斷說に轉ずる事となり、其以外如何なる廣き觀察も何等の用を爲さない。

三、最後に『判斷の對象』なる表現は『主觀的對象』なる名稱の下に轉向し得る。此場合に於ても批判さるべき對象は形式的と素材的の對象に分けられねばならぬ。各判斷に於ける如く、形式的對象の諸問に於ても亦同様、眞志向的事態（此言葉は適切でないかも知れぬ。）は内容に依り問を確定するのであらう。是を正確に性格化する爲に反對に判斷の形式的對象を設置するならば、次の二つの主なる場合が存する事と成る。

(1) 一義的、公式的判斷の形式的客觀（此形態の儘、判斷原理の中に持來らさるべきである。）は、判斷の内容に依つて規定され、かくして其素材の各契機は既知の者である。

賓辭が否定的である如き場合、例へば「黑板は白くない。」とか「地球の石炭の埋藏量は知られてゐない。」とか云ふ場合、形式的對象の該當契機は、將に否定的なる物として即ち「其は知られて居ない」と云ふ事が知られて居る事からして正確に規定される。全ての素材的契機に示されたる形式的判斷客觀も亦規定的である。此の規定性は完成されたる物なる事も表示し得る。形式的對象に於て問は存在を要しない。反對に大抵の問に於ては事象は全く他の物を包含する。一個の判斷の形式的對象と同様、素材に關する對象は全く明瞭である。例へば次の質問（A）をなしたとしよう「硫黄は一千度で融解しますか?」此處に「一千度に於ける硫黄の融解」なる質問の對象は、其判斷「硫黄は一千度に於て融解する。」と等しく其素材に關しては完全明瞭である。今度は次の質問「硫黄は攝氏千度に於て如何なる聚合状態にあるか」（B）を發したとするならば、此問の形式的對象は「如何なる状態」なる言葉を以て表示せられたる契機に關しては不規定的で、其處に未知者（the Unbekanten）が介在して居る。多くの判斷の形式的對象に於けると同様、對象は否定者或は未知者に依り不規定的で明瞭では有り得ない。

又此論據に従つて質問（A）は單なる「然り」或は「否」の答へになつて充分間に合ふが、質問（B）に對してはかかる答は全く無意味である、此處に質問（B）の如き場合に於ては、就中誤られたる必然的の欠乏の除去、問の對象を構成する事態の明瞭度の完成をば、判斷の素材的對象が存在し得るあの完全な全般的に明瞭なる事態にまで導く補正が必要である。否定的な或は未如的な契機を通して判斷の形式的對象が規定される場合、規定せらるべき不完全、其相應すべき判斷の欠陥が其處に定立せられる。即ちかかる種類の判斷は、其に該當せる判斷から認識價值にまでさかのぼり、其處に於て否定的の意味性要素の位置は其相應の積極的位置を取るに至る。併し對象が「未知者」を包含する事が直ちに問の不完

全性或は欠陥では有り得ない。反對に其對象が肯定的契機に依り、全ての點に於て規定である如き問は一般に不可能である。其處には最早何等の問をも包有しない。判斷に依つて分類した問を、本質契機に就いて推し進めて見るならば、不完全性、問の一つの缺點―假にそう云ふならば―是は問の對象に於ける未知者が一義的に規定されないか或は其が明瞭でなかつた場合に從ふ。一方其對象が「未知者」に依存して居る場合、其問は不可能である。

(2) 各判斷の形式的對象は其素材が組成する存在性質に關して一義的に規定せられる。此存在性質は一つの重複的原因を有する。是は全ての中から判斷形式を―將に一箇の判斷の形態として、然して夫は一箇の宣揚として―彫り出し、そして最後の原因をば判斷作用の中に有する。即ち宣揚機能の志向的相關所謂繫素 (Kopula) である。

(コプラは客語の一要素であるが故に是を判斷の第三要素とするは誤りで、コプラは決して必要なる構成要素ではない。コプラは我々の思考の可なり後の產物である …………… ズント論理學第一卷)

其はコプラの賓辭的機能の様式 (範疇的で疑問的で或は無條件的であるかも知れぬ。) を通して其と共に本質的に規定されるであらう。かゝる固定されたる實存様式の性質は問の形式的對象の素材を有しない。若し問が發せられても、何等の判斷作用も行はれず、問を發する所の物に對する我々の位置は孤疑的である。質問命題の問の契機は此孤疑的なる物を他者の中に表現する。勿論夫は問題の本質を虚脱せしめもしなければ、問が將に問にまで及ぼす所の何等の契機をも構成しない。孤疑的なる物、不決斷的なる物其他斯くの如き物は一種の心的狀態で其自身何等の問をも受取り得ないのは、恰も夫が『Aがbなるや否かを知らず。』との判斷、即ち遂には『Aはbなりや?』の問に終る可き所の『Aはb也。』との判斷に於けると同じである。孤疑的なる物の狀態は其が問として來るまでに必ず成さる可き一つの制限を形成する。之に反し問其自身は何等の狀態でもなく特殊の意識作用である。其は孤疑的的狀態から出來すべき一つの實驗である。問の中に於て我々は主觀性の領域を超越しようと企てる。問は眞實性の門戸を叩き、『知!其が例へば該當せる事態を占有する知識の方法

に依り、或は此知識に附隨する不完全性の理解に依り瞬間的に指定する媒質の救けをかりて、實存性の中より到達すべき『知』を探求する。然し此方法は探求せられたる知への到達には充分でない。問は將に達せられざる方法を超越せんとする所の探求であり、我々自身が達し得ない所の物を何物かに依り（換言すれば答に依り）補充せんとする所の物である。問は單なる知の不足ではなく、問の背景に存する不完全性狀態を排除すべき答に依つて他の認識主觀に轉向する一つの本質的なる物で、此主觀への道に於て眞實性の門戸を叩き他者の知識を利用する所の働きである。

「問の形式的對象の素材」なる表現（再び繰返すのであるが）は現在の思念としては一つの狹義の意義を有し、存在に關して其に相應する所の不規定性を包括する物ではない。存在に關する不規定性は諸問の形式的對象の本質契機であり、問の種々の性質に依る興味ある修正が現はれて來る物である。尙今實存的問と事態的問との區別を一言して置かう。

實存的問とは其素材に於ける形式的對象——狹義の意味にして、存在に關する不規定性を除外する——が何等の未知者をも包含して居ない場合である。例へば次の如き諸問は我々に取つて實存的である。「硫黄は攝氏千度で溶融するか。」「神は全知全能なるや。」「神は有るのか。」「事態的問とは其素材に於ける形式的對象（狹義に於ける）が或未知者を包含する場合である。例へば「硫黄は攝氏千度に於て如何なる狀態にあるや。」「實存的問に於ては我々が問ふ所の全事態の存在契機に不規定性が固着して居る。問は此事態の存在或は非有にまで伸びて行く。然し又主觀概念の相關と賓辭概念の相關の間に有る關係の存在特質が存する。

問の形式的對象に現はれて來る二つの不規定性契機を顧れば、假定し且留保を行つた事態 (Sachverhalt) とも名付く可き物の對象は誤謬であつた。故に此表現を範疇的判斷に依つて轉向する意味の事態に於ては、恰も事態の個々の要素間に於ける一層明確なる關係様式が完成した狀態に於て現實に存在しなければならぬと同様、實存様式の性質は完全に規定的な物とならなければならぬ。此論據より問の形式的對象を一つの問題と名付け得る。我々は「問題」なる言葉の意味の中

から、疑問命題と共に一つの論理的對象性として問題の同化にまで導く所の、屢々共に組合はされた論理的意味性契機を排除する様眞に務めなければならない。

参考

1. 判斷命題を例へば眞が偽である總ての物を限定しても此事に依つて命題及び判斷命題の本質即ちそれがしかある所の物、その何(Was)には吾々は聊かも近づくかない。赤或は色の本質を把握せんと欲する時は吾は唯知覺想像、乃至表象せられたる任意の色を眺め、而して個別者又は現實者としては吾々に何等興味のない此色に於て、そのかゝる事(Sein)その何を知れば足りる。(ライナツハ……現象學に就て)

参考

2. 觀念的對象は如何にも存立する (bestehen) が然し決して實存 (existieren) しない。従つて亦如何なる意味に於ても現實的 (wirklich) であり得ない。例へば同等 (Gleichheit) 若しくは差異 (Verschiedenheit) はかゝる對象に屬する (對象論)

参考

3. プレンタノの心理學は精神現象と物体現象とを分ち精神現象の特徴を對象の内在と云ふ點に見出した。意識するとは對象即ち意味を己れ自らの中を含むと云ふ事である。かくて全ての精神現象は意識内容即ち内在的對象と作用との兩方面を具へる。此考へ方を繼承してトワルドワスキーは表象に於ては作用と内容と對象の三つを峻別した。此處に於てか次に起るべき問題は此三者の關係を思惟する事である。而して此使命に應ずる物が將にフツサールの現象學である

参考

4. 吾等の求める判斷現象は、表象知覺等の感性的經驗により、其經驗に示現せられた對象としての現象世界の個別的なる物を結局は對象とし、其に就て判斷志向をなす限り、吾等は判斷に關する敘述に先だつて感性的現象の世界に關する洞察を或程度まで必要とする。(中村克巳、判斷に關する對象現象學的研究)

之迄論じて來た差異と共に、判斷の形式的對象と問題との關聯に於ては、差異乃至判斷に於ける間は決して素材的對象を所有し得ないと云ふ事實がある。誠に問は疑問命題から獨立しては實存し得ない。問は問の内容の志向的相關性としてあるのではない。上述のそして普遍的意味に於て我々は問の中から一つの素材的對象を取出し、且其に依つて「正しき問」を「正しからざる問」から區別する事が出来る。問は一つの眞なる答が其上に實存する場合に正しい。尙又問題素材の既

知者と解答の素材的對象の多くの要素の間に差異は同化を導き出さねばならぬ。此中に我々は問を構成し問題素材の既知者を規定する概念を選択し、あらゆる可能的判斷の中から答にまで至るべき一つの規定的判斷(判斷に就ての一群に關し)を選び出す。此方法に依りて選擇されたる判斷は其に該當する問の正しきか否かに従つて眞であり偽であると云得る。更に勿論一意的に方式化されたる問は正しい。之意味より問の一意性及び多意性に就いて知る必要がある。

問題が條件を附する所の事態は素材的對象の實存に對する充分條件を答としない。故に其は一般には何等の問題或は疑問を存立せしむべき何等の誘因をも存しない所の條件が定められる。他方疑問は少くとも暗黙裡に問題が條件を附する所の事態の一部分を含有する様に方式化さる可きである。尙其外、規定せる間に於ては實存の條件附關係性の假定部分は唯一ではなく、より多くの未知者を認容する即ち其は自ら斯く現れる場合があるのである。

問は示されたる言葉の多意性に依り多意味であり得る。例へば『此人は何か。』と云ふ問に於て『何か。』と云ふ表現は其の社會的地位を意味する場合と職業、姓名、國籍等を意味する場合がある。此處に云はんとする所の物は、問の多意性が使用せられし言葉の多意性に基く物で、問題が條件を附したる事態の不完全なる表示に依る物ではないと云ふ事である。之に關する議論は種々あるが兎に角其問題が一意的に規定せられて居る場合及び質問命題の内容が示す所の全ての用語が一意である場合其間は一意的方式に化せられ得る。多意的な問は直接に知る方法はなく、其多意性に就ては此場合除外せねばならぬ。

從來の考究は餘りにも全體的で粗漏であつたから、一箇の問が正しく一意的である爲には如何に多くの、且又如何に種々の條件が補足せらるべきかを意識性にまで持來らす必要がある。生活及び知識に就て抱いて居た多くの疑問への解答が甚だ不充分で、不批判的質問態度に依つて輕々しく誤道に轉向し、種々の問題及び問題領域は互いに混合せられ、かくて實存しない困難にまで出會するのを以前から我々は感じて來た。學問、特に必要缺ぐ可からざる哲學に於ては、其根本に

横はる疑問に對し、一方誤認或は多意性に基く困難を證明し、他方其最も根本的な問の問題領域の限界の定示に到達せんとて苦しき努力が續けられて來た。『本質的な問』此名稱に依つて暫定的に、問例へば『是は何か。Xとは何か。Xと呼ばるゝ所の物は何か。』と云ふ如き問題、或は又或物の名詞例へば『正方形とは何か、馬とは何か。』の位置を表示する記號Xを把握す可きである。是は我々が各研究對象を一瞬にさせる物に關し、又其等の解答に依り、興味ある對象性の窮極認識にまで到達せんと欲する問題である。然し此問題が提示される時、眞に問ふ所の物に就ての明確なる意識を我々は有するだらうか。我々は半ば意識して居る所の關係性、直觀、或は與へられた瞬間追及する所の限界目的に就て、多くの方法を用ひて解決せんとするのが常である事を知つて居る。斯かる問題に依り、所謂問題の主觀的立場より表示せられたる處の對象を處理す可き何か重要な物に就き、或は單に不明瞭な觀察しか存しない所の本質(Wesen)とも名付けらる可き何物かに就きては不明瞭に感ずるのみである。本質的な問題に介在する不規定性及び多意性に關する意識を存しないならば、所與の問題には興味が起らず、かくして一般に本質問題は拒絶され勝ちである。併し此不規定性及び多意性の發表は或は誤解を排除する物ではあるまいか。即ち其事に就き非現象學派が本質的問題『志向的經驗とは何か。斯々の物の對象の本質とは何か、眞理認識とは何か。』を提示した時、現象學が例外なく證明し終つた物に就ての誤解をば排除する物と思はれる。本質的問題の精密なる分析は、物の本質に關する問題への實證的研究の準備なくして導かれんとするは不可能である。故に本質問題及び觀念問題の觀察に依つて幾分なりとも光明を投じ、此等の問題の對照、分離に依り、根本差異的な所謂問題型態を證明す可きである。斯くの如き提題をなすのは何か具體的心理的經驗の表現法とか、或は又契機中に有する或主觀に依り命題發言を完全に示さんとする思考の表現からではなく、一箇の規定的な對象(事態の判斷に際し、又は問題其物を問ふ事に於て)を配置す可き正確な理想的的概念的單一性としてである。斯くて對象を分析すれば一方主觀的差異の排除に、他方該當せる對象を十全に示さねばならぬの時意味其物が一つの提題ともなる可き客觀的指示に到達

する。我々が此處で論ぜんとした問は、多意的で何等一意的な規定的な問題ではなかつた。併し此等の間に於て、其中に「答」の一列を認る。此答の對象を分析すれば、其前に固着して居る感覺に來り、かくて又問、其物を顧て、分離されたる可能的解釋を精密に定め、再び夫を其處に綜合する事となる。或學派は次の如く唱へて居る。「本質的問に關する一層規定的な論理的關係の解釋と證明は、其説明に依り對象が所與の問題のより眞な、より親しき解答を構成する處の明確なる存在論的關係性に到達しよう。」次の證明は又かくする事に依つて、一つの特定の方法論的研究を留保しなければならぬ。

註 判斷意識は或る事に就てのは認的志向的意識でなければならぬ。

本質的問題に關する多くの意味を普遍的な方式に轉化せしむれば次の如くなる。

(一) 是は何か。(二) Xとは何か。(三) 何がXか。

其處で變數Xの位置並びに個々の概念の位置に於て所謂普遍的對象の檢討が出来る如く、第二の問は更に二種の間に分解せられる。次の例を以て對照すれば即ち

(一) イ 馬とは何か？或は正方形とは何か？

(二) ロ。此馬とは何か？或は此(完全明確なる)正方形とは何か？

此例に依つても明かである様に、個々の對象の概念をば一段に使用する如き幾分敷衍的な意味に於て取り、かくて其自らが純粹對象或は理想對象を取扱かはんとするに拘らず、其には無關係の一個の最低次樣態なる獨立對象を理解し得るのである。第一の問に於ては「是は」なる言葉は常に一個の對象を示して居るが第二及で第三の問に於ては素材的推量の場合同様に變易性の位置を取り、かくて所謂方式化されたる物の中に前者への反對性を有するのである。是と同様に「何か」なる言葉を亦本質的問が二種の間に分化するに従ひ二つの意味を取る。先ず「是は何か」の問は「白いとは何か」と問ひ詰める事、其は又既知のと云ふ當對象の思考の中に定立し得る。對象其自身を吟味する爲に對象を全然瞥見しない場

合或は誰か個々の對象に就て話するのを聞いて其の何たるかを把握し得なかつた場合も同様に定立し得る。次の例でも分る。

「或夜暗い森蔭を通る時、白髪で蔽はれた『何か、或』生靈の様な物が木から私の前に倒れかゝつて來た。』此場合『何か、或』は其本質的の表示に依る物である。

「然し其は何であつたか。」

「其は急いで逃去つたから、何だか分らない。」

1. 此場合の其なる言葉は一つの個々の對象を示して居る。

2. 此對象から「是」なる言葉に暗示さるゝ方向に一義的に規定するに充分である處の識認の一部が理解せられる。

3. 此識認に拘らず、其對象は自ら未知の儘で留保せられ再び「然し其は何であつたか」の間を繰返さねばならぬ。

『是は何か』なる間を其對象の（近接した或は遠隔した）種類に向つて問はんする意味に定立する事を拒否せんと欲するのではない。併し其は不正確に表現せられ、此場合特に『其對象の種類は何か』の間が定立されんとして居る。『是は何か』の問題は之に反し、他の如何なる間も取得ざる位置特に對象種類の表示に依り分たれる事項に關する所の一種特別な意義を有する。

或規定的な種類の物（例へば、生物）から段々下級な種屬に下降して行く時遂には普通知られて居る如く『最低次種類』其下には何等の種類もなく、唯其類型に過ぎざる處の物に到達する。此最低次種類がフツサールの意味に於ける形式的存在論に屬せずして且其類型が獨立した對象（何物かの徴表でもない）であるならば、此類型を個々の對象と名附ける。『是は何か』の問が定立される場合は、其個々の對象の最低次種類が考察さる可き且問題中の未知者を組成しない所の解釋の下に特殊の吟味がなされる如く思はれる。

註1. 個々物に關する定義が普通一般に示される物と異るのは容易に認められる。例へばフツサールは『イデーン』の中で次の如く云つて居る。『獨立し得ざる本質を抽象と呼ぶ。其は絕對獨立的な一個の具象 (Konkretum) である。其處に在る是即ち其事態の本質が一つの具象である現存者を個々物と云ふ。』(一五章、二九頁) フツサールは所謂最後の事態的原質を事態の最後原質の本質とトード、テイに分類して居るが、かくてフツサールに依る個々物は單に現實の個々の對象 (現實的事物) を示すに過ぎず。此處ではかゝる名稱論が完全な事態的證明を有した事は敢て拒まず併作目的の爲には現實的獨立對象の外に理想的個々對象を包含すべき概念を必要とする。例へば、相互に相合せる三角は此意味に於て個々對象である。

註2. 經驗は感性的知覺として先ず個々者「茲に在る是」に關係し、其の物として把握せんとする。(ライナツハ現象學に就て)

最低次型態 (種類) A が『是は』なる言葉で示されたる對象である時、其命題は『是はAである。』と云ふ事に關して居る。『Aである。』なる表現中の『……である。』と云ふ言葉は、此處では『亦である。』なる表現中に於けると異つた作用を行なふが、又一方對象の規定されたる一群即ち對象の階級に對する其對象の添加作用を行ふのではなく、且又規定の最低次型態の範例としての當該對象の把握にまで轉向する物でもない。其は所與の命題に於て全く獨斷的に一箇のAを以て其對象の完全なる同化作用を行ふ。Aなる表現が最低次型態の名稱としては理解し得られないのは明かである。尙又『是はAである。』との命題は全く不合理である。(Aなる種屬はA屬の最低次型態なる事を前提する。) 畢竟Aは一般に其對象の外部に在る何物をも表示し得ない。此狀態に於てAは何物かを表示するとの思考が傍に存して居る即ち(1)其對象自身に包含する所の物及び將に其は個別契機的全對象がある如き處の物。(2)其を規定的な物とす可く、其自らの爲定立せる全體としての對象を最も明確なる方法の上に性格附け、其をA對象にまで及ぼす所の契機である。古い用語を用ふる事が許さるゝな

らばホイオン（本性）と個々のゲイノス（類）に分たれる所の對象のテイ（……である事）の契機と云ふ事が出来る。此の契機は對象の性質と呼び得る。對象の性質に於て、個々の存在様態（個別的契機）をば、此様態に包含せらるゝ質的契機より分つとすれば、對象性質の質的契機は多くの場合例へば各人に於て明かに爲されるのであるに拘らず、個々の存在様態を其自身に表示し得ない事が普遍的に云はれ得る。同様に對象の性質が個々の對象の全目的を一義的に規定し得ないのは明らかである。

註 性質は對象の本質に屬するに拘らず、對象の個々の一定した性質と何物かの本質とは同一に非ず。此處で『性質』と云つた所の物はヘーリングが個々の對象に依り直接モルフエー（形態）と名附けた所の物と同一である。

斯くして若し對象の個々の構造的性質が表示せられたる方法の上に規定せられるならば、『是はA也。』の命題中に於けるAなる表現がかかる性質の名稱で有り得ぬ事は更に明瞭である。『……也。』が其對象とAとの間の完全なる同化作用を爲すならば、Aなる表現は對象の何等の契機も示さず、其處では契機の何等かを持つた如何なる對象も完全に同一では有り得ない。契機は實際フツサールの名稱論に於ける個別的對象の獨立し得ざる部分の最高次の物である。Aは又對象の個々の構造性質を示し得ない。即ち夫は暗示的な是に依り示されるであらうが然し、個々の性質に依り既に組成せられて居る個々の對象全く此對象を意味するに違ひないのである。併し個々の對象に依り既に組成せられたる對象から讀み取る所の物に於て、我々は、性質に依り未だ構成せられない個々の對象の存在した事から自然に遠ざかる様に思はれる。斯かる事はそう明白ではない。各個々の對象は一般に其が實存する所では性質に依つて構成せられる。是は對象を云はば性質の側から性質を通して把握する處の個々の對象の主觀的把握方法の存する事に矛盾しない。

『是はAである。』（例へば是は大である）の命題に於て不問に附せられたる方法を其性質に於て把握する主觀對象の同一性は賓辭用語に依りて示されたる物を以て、或は把握されたる對象の個々の性質に依り主張せらるゝであらう。かくし

て其對象は如何なる個々の性質に依り構成せられるかが明瞭と成り得る。

疑問『是は何か？』なる問題中に於ける未知者は何に依つて構成せらるゝか。是は把握されたる對象を通じて其構造的個々の性質に依りて出來得ると想像せられる。併し問題は、又かくて問の對象と共に是なる言葉に依りて示されたる對象と未知者の需要價值との間に横はる同一性の存續を組成する。斯くして此同一性自身が問題中の未知者に屬しない事が強勢せられる。其間におけるは恰も浮標中にあるが如く、問題の既知者は其需要價值を組成する第二項がかゝる主張に失敗する間は（是はAである）との命題中に主張せらるゝ程には）主張されない。此同一性自身は例へば「是は一般に或、何物かであるだらうか」の間に於て見らるゝ如く、問に於て、定立されるのではない。之に反し『是は何か』の間に於ては『是は』なる言葉に依りて示されたる個々の對象は性質に依る構造的な何者かである事の疑ひを入れる餘地はない。即ち如何なる性質により其が構造せらるゝか、又何が其を特質附けるかを敢て知らうと欲しないのである。此等の根據より問題中の此同一性の存續は問題中の未知者を組成するのでは無いと云ひ得る。且又其は他の何者でも有り得ない。然り。問題の既知者は一つの個々の對象であり、各個々の性は個々の性質に依つて構造せられる。此事態は又問題自らを條件附けるのである。斯くて『是は何か？』の間に於て組成せらるゝ者は次の如きである。

1. 問題の未知者は把握された對象の構造的性質に依り一層個々のなる物である。

2. 問題の既知者は、指示の相關が形成し、考究されなかつた様式の本質が把握する主觀的な物に依り一層個々のなる對象である。

3. 問の問題は既知者と未知者との間に存する。

4. 問の前提是個々の性質に依り、各個々の對象が構造されると云ふ事態である。問の前提はずつと離れて、我々が問題の既知者に關する識認の極小値を取る事、（其は是なる言葉が表示する方向を一義的に規定する様に思はれるが）に屬す

る。問が多意的なる時は此反對の場合である。此四箇條の定立に依り『是は何か』の問題は意識にまでもたらされる。

註、判斷眞理は判斷意識のみに求めらる可きでない。判斷作用と其に依つて把捉的に志向せられたる事態この一致適合に於て判斷眞理を求む可きである。事態は結局經驗對象に歸屬せしめられると考へ得るが故に結局判斷意識と經驗對象との一致適合に於て、判斷眞理が求められねばならぬ。

『此犬は何であるか?』の問は一般に矛盾に満ちた物として拒絶せられ勝ちである。『此犬は何か?』『此馬は何か?』の問は如何にして合理的に考察せられ得るか。然り、其事に就ては證明し得る判斷が存在する。即ち第一は其は眞なる事。第二は上述の問に對する眞實なる解答が全く合理的に構成せられ得る。例へば『此犬は哺乳動物である、此犬は生物である。』等。かくて與へられたる判斷が眞であり上記の如き解答が形成され、此問が自ら明白なる意味を有する事を敢て拒否する物ではない。然乍問中に現はれたる言葉『何か』は『是は何か』の問中に現れたる『何か』と同意義を有する事より是も亦充分吟味せらる可きであるが前述に於て検討した同一性の存在を前提として居る故に是は敢て述べる必要はない。然し二重意味性と云ふ事を考へるならば、『何か』なる言葉に他の意味を與へる事が實際に可能なる場合がある。

『此犬は哺乳動物である』(A₁)或は『此犬は生物である』(A₂)『此犬は私の所有物である』(B₁)或は『此犬は私が昨年買つた犬に似て居る』(B₂)若し『此犬は何であるか』の問に際し何等の補足語も置かれなかつたならば、B₁及びB₂なる答は期待され得ないし、又此問が當然其處に歸着す可しとは考へ得られぬ。然し此種の答は全く無意味な物ではない。更に次の如き場合も有り得る。『此犬は四肢だ(美しい、強い)等』(C)『此犬は三角だ』(D)。Cなる命題も亦全く眞であるが所與の問に對する答としては何等期待されないし、更にDなる命題は其自身矛盾をなして居る。提出されたる問題は多意的であり此多意性への答としては多くの判斷がなされるが、此多意性を分析して其の該當なる物を求むれば畢竟A₁とA₂とに歸する。

『此犬は哺乳動物である』と云ふ命題も次の二つの判断の場合を生ずる。

(甲) 此犬は哺乳動物なる種屬に屬する。(乙) 此犬は哺乳をなす。(哺乳する類である。)

甲は乙を前提として居る。甲が眞なる場合乙も亦眞である。此論據より獨斷的ではあるが、甲が眞であれば此場合のみ乙は眞であり、逆に乙が眞であれば甲も亦乙であると云ひ得る。若し判断甲が眞であれば『犬』なる個々性の屬性から哺乳動物なる種屬までの關係が客觀的に生じて来る。二つの對象 G_1 と G_2 との間の關係 R が客觀的に生じ得るが故に G_1 は G_2 と等しく、かゝる性質に依り構成せらるゝ換言すれば、其處より流出する所の特質なる物を有せねばならぬが、此特質は R の存立を其儘では許容せず、充分條件を附する所の物である。

個々の本性に依り組成せられた對象と、相互關係の様式の間に於ける存在論的差異は、既述せる『何か』なる言葉の意味に於ける類推法的差異に該當する所の、判断に於ける賓辭の種々の様態、問の論理的差異に相關して居る。かくて『何か』なる言葉は一方に於ては其構成的本性に依り把握されたる個々の對象に到達し、傍ら構成的本質契機は未知者の眞髓を形成し、他方に於ては關係の存立に於て相互的である所の様式に於て問はる可き對象に到達する。此事より『 x は何であるか。』の問の問題中には如何なる要素が包含せられ、若し普通の意味で解釋するならば、思考せられたる判断『此 x は一つの y である。』が何に依つて、正當なる解答として其問の上に組成せられ、而して此場合 y は x の一種屬である事が理解されるであらう。

(1) 問題中の既知數は個々の構成的性質に依り把握される所の一層規定的な個々の對象を形式する。

(2) 問題中の未知數は一層規定的な個々として其場合の對象のテイ(…である事)に於ける役割を演ずる。此役割と云

ふのは他の契機に依り構成せられる種屬による物で、是は問題中にあつて未知數の眞髓を組成する。

(3) 問題は問題中の未知數が形作る役割に於ける問題既知數の現出に依存する。

(三)次の前提が存在する。

イ、問題中の既知數或は問題の主體は一種屬となり得。

ロ、其自らは一方では問題の主體が成得る所のかゝる種屬の存在を必要とし、而して他方では此主體が構成する處の性質及び其と直接關係のある徵表 (Merkmale) を許容する。

ハ、問題中の既知數 (其構成的性質に依り規定せられて居る) に依り問題の主體が成得る所の種屬體系は規定的である。

二、個々性としての問題の主體と種屬との間の關係に依り構成せらるゝ一箇の役割が存在する事

ヘーリングは次の如き分類を試みて居る。

1. 個々の對象
2. 本質 (對象の本質)
3. 本質性
4. 觀念

ヘーリングに従へば各個々の對象は將に其本質であり、且かゝるが故に對象其物がかくあると等しく個々性たる唯一の本質を有する。本質に關しヘーリングは『其構造全體に於て把持せられたる客觀の *Sein* (しかある事)』と云つて居る。

しかある事 (ボイオン、アイナイ) の單一の特徴は其本質の特徴である。對象のしかある事 (ボイオン、アイナイ) —— 其總括的存立は本質と一致す。—— は廣義には其狀態を示す所の存在者のしかある事 (ボイオン) から嚴密に區別せられねばならぬ。自らしかある事 (ボイオン) に關係して居る理解は、我々をしてアリストテレスが、ボイエイン、カイ、パスケインと名付けた物 (對象をば單に、例へば B に對する關係に於ける A の大存在は各々のボウ (何處) ボテー (何時) アイナイ (有) と云ふ如き哲學的關係に依り、他の對象に歸せしめて對象のしかある事には歸せしめない所の全ての關係的徵表に屬する) が其事に敢て期待され得ぬ事を容易に了解せしめる。此意味に於て筆が書く能力を有する事は筆の本質に屬し、之に

反し筆が今机の上にある事は全く不必要である。

參考

1. 「ゾーザイン」とは判斷玆に假定の對象たる、客觀的の一種であり客觀的ゾーザインの事である。之こそは有及び存在を超越せし事物の本質的性質（本質的關係）であり従つて對象其物の本質である。

參考

2. 假定は判斷の或種の欠損ではなく、判斷とは異つた一つの把握作用でなければならぬ。若しそうでないならば其は *Seem* と云ふ如き特異なる世界を把住し得る唯一の場合には有得ない。*Seem* は *See* を加工する事に依つてではなく、之とは異りたる立場に立つ事に依つてのみ、我々の持つ事の出来る世界であるからである（山内氏現象學序説）

若しボイオン、アイナイからボイオン自身に至る處を瞥見するならば、對象の個々の構成的性質と呼んだ所の物（アリストテレスの用語に於てはテイ即ち直接的モルフエー）と、狹義に於けるボイオンの間に根本的差異のあるを認め得よう。ヘーリングが正しく注意したる如く、アリストテレスはテイ（*What*）に三つの範疇を對立さして居る。ボイオンとボウソンとボウ。ボイオンとボウソンは共に把握され得るがボウは對象の本質では一般に觀察され得ぬ、然して又ボイオンは二つの意味に分類し得る。

1. ボイオンが其に於て對象の本質を表はし且テイに對立する狭い意味

2. (ボイオン) + (テイ) に於て把握される廣い意味

ボイオンを第一の狭い意味に取るならば、テイ、アイナイは構成的性質に至る對象の解明を意味し、之に反しボイオン、アイナイは其特質に至る解明を意味する。テイ、アイナイはボイオン、アイナイと同じく對象の本質に屬する。

對象の性質は對象を組成し、かくて對象の構成的性質と呼ぶの論據よりヘーリングは對象の性質を直接的モルフエーと名附けた。此事は同時に赤色からは單に對象の構成的性質の意味即ち一箇の色の意味ではなく其自身の爲に有る赤色の意味に於て、一箇の理想的なる質。赤色換言すればヘーリングの云ふ所の『本質性』即ち一箇のアイドスを認識し得るのであ

る。ヘーリングは本質性は最後の條件として對象に就いての實存の可能性を眺めんとし、其自らは未だ其存在に他の物を要しない事を主張し此論據より本質性は純粹な意味でプロテエ、オヴシア（現存本質）であると云つて居る。種々の本質性の固有の融合状態が存すると云ふヘーリングの主張は一層明瞭になるのである。

理念に就いては次の事が云はれる。

1. 理念は本質性には全く無關係な構造の重複性に向つて其本質を表示する。
2. 理念は其内容に於て同様に本質に缺けて居た所の物なるが然し不明瞭性の意味に於ける普遍性より彩色、契機、一般、或は光、一般と云ふ事は、此處では本質性は完全に規定されたる眞の本質性なるが故に全く無意味の様に思はれると云ふ風に説明して居るからである。

3. 多くの理念は其内容に於て時間的・空間的局所限定の不定者を現はす。

4. 何等の本質性も該當しない所の構成的對象性質の理念が存在する。（ヘーリングに依れば不純粹形態“unechte Morphe”凝塊状態。）本質性は構成的對象性質の理念以外の何物でもないと云ふ見解は不可能である。

5. 本質性と理念との間の關係は其本質性の具体化の理念包含中の定者の下に見出さるゝ。此方則よりヘーリングは理念を個々の對象と同様デキテライ、オキシエイ（二次的本質）と名附けかくして具体的同化に對しては、實在的對象に於ける實在化の特別なる場合と云ふ事を以て正當に抗辯して居る。

フエンダーは其論理學に於て判斷の分類を、判斷對象を組成する事態の種類より導き出して居る。彼は全ての判斷を(1)對象が主觀對象の内部に横はる事態を構成する所の判斷 (2)所謂關係的判斷に於ける判斷の二つに區別して居る。彼は更に判斷の第一分類を 1. 規定判斷 *Bestimmungsurteile* 2. 屬性判斷 *Attributionsurteile* 3. 存在判斷 *Seinsurteile* の三種に區別し且規定判斷に對しては『其は何(Was)なる表示に依り主觀對象を規定するが故に。』との理由を附して居る。此規

定判斷こそは『是は何か？』の問に答へる物である。之に反し屬性判斷は『是は如何にあるか？』(Wie ist das?)に答へる物で其中に主觀對象の或特性を示す。最後の存在判斷或は實存判斷 (Existenzurteile) は主觀對象の實存様式への問に對する答を與へる。何故フエンダーは所與の問題を一つの規定判斷の下に置いたか？最初は規定判斷一般に依つては唯『是はXである。』なる形類の判斷を理解し、其後になつて此判斷に依つて『金は金屬である』との判斷が正しくある可きだと云ふ事を経験する。其内には存在判斷は『是は何か？』の問への答は構成せずして『金とは何か？』の問に對する答を構成する事を知る。此處で感ぜられる不明瞭性はフエンダーが我々と對立した問題の間にある差異を意識にまでもたらさなかつた事に依つて誘起されたか、或は規定判斷への歸屬性 (Zugehörigkeit) の上に差異づけられた他の根據が有る爲であらう。此事に就いてフエンダーは何等の論議もして居ないが唯、規定判斷のもとにあつては例へば『是は正方形である。』と云ふ如き判斷のみが是認せられる。之に反し『此正方形は兩邊相等しき直角なる平行四邊形である。』と云ふ判斷は別に本質判斷 (Wesensurteile) とも呼ばるべきである。即ち我々は規定判斷のもとに於て個々の構成的判斷に依つて主觀對象の其實辭を把握する所の判斷のみが理解できるのである。

『是は何か？』の問が是迄受けて來た所の多意的な問題其は問題の既知要素が未知要素をば一義的に規定し得ない事に基いて居り、且此事は如何に種々の答が『是は何か？』の問題に對してなされるかと云ふ事實を論證する事に關係して居る。今迄述べて來た種々の可能な場合を分類する事に依つて此文を結ぼう。

1. 『是は何か？』なる問の意義内容は、問ふ事は單に其對象の名稱を知らんと欲し、且其は眞の名稱表示を完全に與へる可きであると云ふ事を全く排除する物ではない。然し名稱 (時に固有名稱) が對稱の獨自性と特質の關係に役立つと云ふ事實、及びかくして其構成性質を通して其對象を把握せんとする事實に關して、其は接近した相互關係に於て見出さるゝ所の二つの問『是は何か？』『是を何と呼ぶか？』の爲に容易に理解せられる。問『是は何か？』の斯かる不正確な轉向

より生じ易き誤謬は比較的容易に除外され得る。然し此誤謬が屢々重要とされる事は『是は何か』の問に於て問はれたる物が名義上の意味に於て解釋を變更し、純粹用語學説明に於ける論議が轉向して、斯くて其が重要性を失すると云ふ場合の有る事を立證する。特に現象學的方法是屢々多くの經驗を要する故に、純粹事實的な方向の一定せる問を此不適當な唯名論的方法の解釋に變更し、かくて簡單に問題を問題其物の外に排除し勝ちである。逆に其處で事實的問題を研究して、單に用語法的なる事のみの研究に陥入らんとする場合も生ずる。

2. 『是は何か？』の問は又單に目的の爲に一義的な規定を設ける事がある。又名稱（特に固有名詞に就て）の眞の表示は此名稱が問ふ所の物に特に接近して居る時其目的に充足する。此處に此意味で一つの規定判斷が爲し得られる。

3. 問が屢々指定する所の志向は一つの様式圖形の方法に依り其對象を把握し得る。（此事に就ては餘り述べなかつた。）此場合には多くの根本的な重要な解答が與へられ得る。解答の數は倍加された從屬狀態の數に依り限定され、其は契機として對象の構成性質中に包含される。

4. 前に述べた理念の可能性は『是は何か』の問には規定判斷を以て答へられる事を前提とする。『是は何か』の問の特定の意味は如何なる物に於て問題中の未知者は構成性質に依り把握された個々對象を組成するかである。此場合、問に對する答は唯一にして此答を構成する爲には其對象を本質に於て認識し、ポイオン、アイナイとテイ、アイナイの差異の上に働いて構成性質の質的契機を直觀的に把握せねばならぬ。

（一九三一、——五。一五）